

2017年12月10日聖学院教会聖日礼拝説教

「マリアの子—神にできないことはない」

ルカによる福音書 1：26－38

菊地 順

「神にできないことは何一つない」。天使ガブリエルは、そうマリアに語りました。「神にできないことは何一つない」。天使ガブリエルがマリアの許を訪れて告げ知らせたことは、途方もない話でした。また、そもそも天使ガブリエルが出現したこと自体、途方もないことでありました。天使は、旧約聖書にも新約聖書にも登場してきますが、それは人間と同じように神によって創造されたものでありながら、人間を超える力を持つ霊的な存在で、神と人間との間に立つものとして描かれています。ヘブライ語では「マラーク」と呼ばれ、ギリシャ語では「アングロス」と呼ばれていますが、共に「使い」を意味しています。神からの使い、天からの使い、それが天使という意味です。ですから、英語の **angel** という言葉も、そのまま「天使」と訳されています。

旧約聖書で語られている天使は、しばしば神を取り囲んでいる宮廷の大臣たちのように描かれています。そこで、天使たちは神を賛美し、時には神から遣わされてイスラエルの民を助け、あるいは人々に神の意志を伝える働きをしています。そのため、天使たちの出現はしばしば神ご自身の出現であるかのように考えられてきました。

この天使にはいろいろな天使がありますが、その中でも、旧約聖書の外典とよばれる書物の中では（特に「エノク書」）、ミカエル、ガブリエル、ラファエルといった大天使たちについてより詳しく語られています。今日の聖書箇所が登場するガブリエルも、そうした大天使の一人で、旧約聖書の中では、ダニエル書に登場してきます。ガブリエルという名前は、ヘブライ語で「神の人」ないしは「神はわたしの勇士」という意味で、ダニエル書では、預言者ダニエルに人間の姿を取って現れ、ダニエルが見た幻について説き明かしをしています。そうした大天使が、今、マリアのところに現われたのです。そして、神の計画を告げたのです。

そもそもマリアは、ナザレの田舎町に住んでいたヨセフという人の「いいなずけ」でした。聖書では「おとめ」と訳されていますが、元の言葉では「少女」という意味です。しばしば、この言葉は「処女」とも訳されてきましたが、格別そうした意味はありません。ただただごく普通の年若い女性を意味する言葉にすぎません。そして、その名前は「マリア」と言いました。このマリアとい

う名前は、旧約聖書の出エジプト記に出て来るアロンの姉ミリヤムに由来する名前です。そのヘブライ語名をギリシャ語綴りにしたのが「マリア」という名前です。ただしルカ福音書では、ミリヤムという名に由来することを明確にしようとしてわざわざ「マリアム」と表記していますが、マルコやマタイ福音書では「マリア」と表記しています。それは、ギリシャ語では、女性名詞の語尾は<-a>で終わる方が自然であったからです。

そうしたごくごく普通のおとめであったマリアのところに、天使ガブリエルが現われたのです。そして、こう語ったのです。「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる」。「おめでとう」というと、何か特別なお祝いを語る言葉のように聞こえますが、ここではそういう意味ではありません。元々の言葉でいけば、「幸いあれ」といった意味の言葉で、当時、人々が出会った時や別れる時に、ごく普通に用いていた挨拶の言葉です。また「主があなたと共におられる」という言葉も同じです。ガブリエルは、そうした挨拶の言葉を語ったのです。しかし、それを聞いたマリアは「戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」と聖書には記されています。おそらく、実際には、全く見知らぬ男性が突然現れ、何の前触れもなしに挨拶の言葉を語ったのです。マリアが戸惑ったのは当然です。しかし、マリアは、戸惑いながらも、「いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」のです。ガブリエルは、続けて語りました。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人となり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」。このガブリエルの言葉に対し、マリアは、「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」と答えています。マリアは、何よりも、「あなたは身ごもって男の子を産む」と言われたことに驚いたのです。まだ結婚もしていない自分が男の子を産む、そんなことはあり得ないことだと即座に思ったのです。これも、当然のことではないでしょうか。それに対し、ガブリエルは、再度語ります。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」。この言葉を聞いて、マリアは、理解できたのでしょうか。おそらく、できなかったと思います。多分、ガブリエルもそれを察知したのだと思います。そこでガブリエルは、さらにこう語りました。「あなたの親類のエリザベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている」。ガブリエルは、マリアの親類のエリザベトが高齢であるにもかかわらず、神の恵みによって身ごもり、すでに六か月になっていることを告げたのです。それは、マリアにも驚きのことでした。起こりえないことが起きていたのです。人間の

常識では計り知れないことが起きていたのです。おそらくマリアは、そう言われて、率直にその事実に目を向けたのではないのでしょうか。そして、そのとき、ガブリエルは最後の決定的とも言える言葉を語ったのです。「神にできないことは何一つない」と。おそらく、この言葉を聞いたとき、マリアは、その言葉をそのまま、心の底から、何の疑いもなく受け入れたのではないのでしょうか。「神にできないことは何一つない」、この言葉が、このとき、全く未知の世界に招かれていたマリアに、その未知の世界に踏み入る力と決意を与えたのではないのでしょうか。マリアは、答えました。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」。「お言葉どおり、この身になりますように」。それは、「神にできないことは何一つない」との天使ガブリエルの言葉に、全幅の信頼を寄せて、身を委ねた言葉であったと言えます。誰が信じ得たのでしょうか。まだ結婚もしていないのに、神の力によって子供を身ごもるなどということ。しかし、マリアは、「神にできないことは何一つない」との天使ガブリエルの言葉を受け入れ、それを信じたのです。そして、それが、イエス・キリストの誕生となったのです。

ところで、この「神にできないことは何一つない」という天使ガブリエルの言葉は、その後のマリアを支える言葉ともなっているのではないのでしょうか。そして、ある意味、マリアはこの一点において、その信仰を貫いて行くことになったのではないのでしょうか。ルカ福音書の1章の後半には、マリアの賛歌が記されていますが、その中で、マリアはこう神を賛美しています。49節で、「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいました」と主を賛美したあと、51節以下で、「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い者で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」と語っています。それは、人間の力では到底なし得ないことです。特に、身分の低い者、飢えた者たちにとって、その社会を覆すことなど到底できないことです。しかし、神は、「思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろ」されるのです。それは、ただ神にのみなし得ることなのです。マリアは、そうした神を心から賛美したのです。そして、「神にできないことは何一つない」との思いを一層深め、ますます心からの信頼を神に寄せて行ったのではないのでしょうか。そして、それが、マリアの生涯そのものを貫く信仰となっていたように思います。というのも、それは、主イエス・キリストの歩みともなっていたからです。

主イエスは、その生涯の最期を迎えるとき、大きな試練に立たされることになりました。十字架の死を目前にして、その恐れと不安の中で、父なる神に血の汗を流しながら、真剣に祈らざるを得なかったのです。そのとき、主イエスは、こう祈りました。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この

杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコ 14:36)。主イエスは、十字架の死を前にして、恐れと不安の中で、できればそれを取り除いて下さいと祈ったのです。なぜなら、そこには、「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります」との深い信頼があったからです。しかし、主イエスは、そのとき、その信頼を身勝手な思いに引き込もうとはなさいませんでした。そうした全幅の信頼を寄せながらも、さらに、「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈ったのです。いわば、もっと深い所で、一層本質的なところで、「神にできないことは何一つない」との信頼に生きたのです。それが、わたしたちに救いをもたらす十字架の出来事となったのです。そのように見てきますと、母マリアにおいても、その子イエスにおいても、「神にできないことは何一つない」との心からの信頼が、その生涯を貫いていると言えるのではないのでしょうか。そして、その一点に生きるとき、わたしたちもマリアの子となっていくのです。そして、マリアの子となるべく、招かれているのです。

ある意味、「神にできないことは何一つない」との信仰は、単純かもしれませんが。しかし、それは、究極の一点へと突き詰められた単純さとも言えるのではないのでしょうか。ある人は、偉大な思想というものは、すべて単純であると言っています。いわば、ある一点に集中し、その一点を突破することによって、永遠の世界に開かれている、そうした究極の一点を持つ思想こそ、偉大な思想であると言うのです。今年が宗教改革 500 周年を覚える年として、繰り返し、マルティン・ルターのことが語られ、その教義の中心にある「信仰義認」について語られてきました。ルターと言えば「信仰義認」、「信仰義認」と言えばルターというのがお決まりのことになっています。それは、今では誰もが口にすることで、聞き飽きたと思われる方もおられるかも知れません。しかし、やはり、ルターと言えば「信仰義認」なのです。ルターは、その一点に集中し、その一点において突破した人なのです。そして、その一点において、時代を根底から揺り動かした人なのです。それは、他の思想家にも言えることだと思いません。古代の偉大な神学者にアウグスティヌスという人がいますが、アウグスティヌスは「恩寵」ということを語った人です。人間のすべての存在に先だって神の恩寵、神の恵みがあるということを豊かに語ったのが、アウグスティヌスという人でした。そのため、アウグスティヌスは、しばしば「恩寵の博士」とも呼ばれています。その意味では、アウグスティヌスは「恩寵」という一点に集中し、その一点において突破した人だとも言えます。また中世に活躍した「聖人の中の聖人」とも呼ばれるアッシジの聖フランシスコは、「清貧」の生き方に徹した人でした。徹底的な清貧の生活をとおしてキリストと一つになろうとした人です。そして、その生涯の最後には、キリストが十字架で受けて 5 つの傷

がその身に現われたと言われていています。その意味では、聖フランシスコは「清貧」という一点に集中し、その一点において突破した人であったと言えます。そのように、偉大な思想家、偉大な人物というのは、一点に集中し、その一点において突破した人たちであるのです。

マリアは、「神にできないことは何一つない」との信仰を抱きました。そして、いわば、その一点に集中し、そこで突破していったのです。そして今日、このマリアの信仰を告げられたわたしたちは、この一点へと招かれているのです。そして、この一点は、誰の人生においても、人生を決する決定的な一点となるのではないのでしょうか。なぜなら、この一点を持たない限り、わたしたちは、結局のところ、諦めの世界へと陥って行くほかはないと思うからです。わたしたちの人生には人間的な可能性、人間的な希望があります。それが充分発揮され、実現されれば問題はありません。しかし、現実はどうでしょうか。それは、難しいのではないのでしょうか。わたしたちは日々、さまざまな問題に遭遇しています。人間関係の問題、自分の能力の問題、健康の問題、お金の問題、数え上げて行ったら切がありません。そうした問題に遭遇する中で、人間的な可能性とか希望といったものは次第に薄れて行くのではないのでしょうか。そして、いつの間にか諦めの境地に捕らわれて行くのではないのでしょうか。そして、しまいには、「どうせ無理だよ」「人生、所詮こんなもんだよ」といった諦めの言葉が口を衝いて出て来るのではないのでしょうか。そうした諦めと絶望は、紙一重だと思います。しかし、人間は絶望の中を生きることはできません。それは、哲学者のキルケゴールが言ったように、絶望は死に至る病であるからです。諦めに陥り、絶望に捉われるとき、人は精神的に死を迎えて行くのです。しかし、それを打ち破ることは、人間の可能性や希望にはできないのです。それができるのは、人間の可能性や希望を超えた神の可能性、神の希望なのです。「神にできないことは何一つない」と語られる神の可能性、神の希望こそが、そうした諦めや絶望から人を救い出すことのできる唯一の力なのです。そしてまた、わたしたちが絶望の中でも立ち得るただ一つの足場なのです。この信仰に立つとき、わたしたちは新しい光を見上げることができるのです。

クリスマスは、いわば、この新しい光を見上げることから始まったとも言えます。「神にできないことは何一つない」との天使ガブリエルの言葉を、心から受け入れたマリアによって、クリスマスは到来したのです。わたしたちも、このマリアの信仰に倣いたいと思います。そして、主イエスと共に、マリアの子として、新たな思いを持って歩み出して行きたいと思います。